



特集・あいあいネットの ファシリテーション 2

活動レポート

- ◆JICA研修 6
- ◆西部バリ国立公園プロジェクト 8

特別企画:いりあい交流より 10

コラム

- ◆事務局短信 9
- ◆オススメ地域 12

2012.9

Vol. 3



地域にあるもの、事実を目を向ける -JICA東京「住民主体のコミュニティ開発」(新潟県上越市、中ノ俣集落にて)

いりあい・よりあい通信

一般社団法人あいあいネット(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク)

あいあいネットのメンバーは日本と世界の様々な所で活動し、日本と海外を行ったり来たり。一見バラバラでまとまりのないような私達をつなぐ1本の糸が、「いりあい・よりあい・まなびあい」です。あいあいネットの活動やそこに関わる人々の思いを、いりあい・よりあいの糸でとじ、皆さまにお届けします。

これからの主なスケジュール(2012年9月~翌1月)

- 9月 「ウガンダ北部地域行政官能力向上」研修受入(9/24-10/19)
- 10月 いりあい交流、本とDVD出版記念イベント(インドネシア、10/20)
西バリプロジェクト報告会(予定)
ベトナム短期専門家派遣(10月下旬~11月初旬)
- 11月 西バリプロジェクト、現地研修(インドネシア、11月下旬~12月上旬)
- 12月 ベトナム研修受入(予定)
- 1月 「住民主体のコミュニティ開発B」研修受入(1/10~2/6)
ベトナム短期専門家派遣



昨年のウガンダ研修の様子(熊本県水俣市)

あいあいネットでのインターンを終えて

5~8月にかけて事務局でインターンをした倉田紗希さんより、インターンの感想を頂きましたのでご紹介します!



私はこの3ヶ月間で多くの事を学ばせていただきました。特にJICA研修への参加が印象に残っています。地域づくりをする上で国は違えどもお互いに学ぶことが多くあること、一つの研修を支える裏側の作業期間が長く、たくさんの連携があって成り立っていることを知ることができました。そして参加してきた活動を通して、地域を重点に置いた考えの意義を発見することができました。

あいあいネットの方に限らず、関わってきた全てのみなさんの元で学べたことを忘れずに、これらの経験を活かした活動をしていきたいです。地元から事務局が近いのでこの先も何らかの形で繋がっていただけると考えています。短い間でしたがインターン生として関わることができ、大変嬉しく思います。ありがとうございました。

(桜美林大学3年 倉田紗希)

あいあいネットのファシリテーション

～その肝をあえて日本語で表現すると・・・～

長畑誠(あいあいネット専務理事)

あいあいネットの活動はインドネシアと日本、そして最近ではベトナムへと広がり、その内容も「いりあい交流」「西部バリ国立公園プロジェクト」「地域の現場から学ぶ研修」等、さまざまである。地域も内容も異なるこれらの活動で、共通して重視されているもの、それが相手のイニシアティブを引き出す「ファシリテーション」だ。この「ファシリテーション」は、あいあいネットの代表理事でもあるソムニードの和田信明氏が切り拓き、同じく当会の監事でもある参加型開発研究所の中田豊一氏が理論化した原理と技法に沿ったものであるが、私たちの活動を通じて、いわば「あいあいネット流」のファシリテーションのあり方が少しずつ見えてきているように思う。本稿ではそれを少し整理してみたい。

～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～☆☆～～

懐に入る

ファシリテーションの出発点として大事にしているのが、相手との「パートナーシップ構築」である。これをインドネシアの仲間たちは「Pertemanan」と訳している。言葉通りには「友達になる」という意味。Facebook利用者が世界一と言われるインドネシア人らしい表現だ。一方、私たちの研修に参加したベトナムの行政官によれば、「ベトナムでは『共に食べる』『共に住む』『共に働く』がパートナーシップ構築の秘訣と言われている」とのこと。(元)社会主義の国ならば、かもしれないが、「共に食べる」を「相手の家を出されたものを共に食べる」とすれば「相手を受け入れる」ことに、「共に住む」は「寝起きの姿も見せる」から「自分をさらけ出す」ことに、そして「共に働く」は「共通の目標を持つ」ことに言い換えられるのではないか。では日本語で言うと何だろうか。「懐に入る」かもしれない。私たちが行う研修では、参加者全員が自由に話せる場を作ることを重視しているが、その時に大事なのが、参加者たちに「ここは自分の場だ」感じてもらうことである。ファシリテーターが自分に相手を引きつけるのではなく、「相手の懐に入る」こと。こちらが相手の世界に「参加させてもらう」こと。これが心を開いてもらい、自由に話ができる第一歩になるのだと思う。



参加者が自由に話せる研修となるよう、場づくりにも十分配慮する

寄り添う

相手の懐に入った後、どうするのか。和田・中田のファシリテーション理論の中心をなすのは、「事実質問を積み重ねる対話」である。西部バリ国立公園周辺のスンプルクランボック村では、公園職員のスギアルト(通称スギちゃん)がデイゴの木を前にして「これは何の木ですか」「いつ頃からあるのですか」という質問をきっかけにして、カンムリシロムクが翔び交っていた昔を村人に思い出させることに成功し、そこから村人のカンムリシロムク保護に向けたイニシアティブが始まった。全ての始まりは、スギちゃんの「これは何の木ですか」にあり、事実質問を基軸にした対

話というのが、相手の気づきを促す力になっている。ただ、この「事実」と「対話」の中身だが、何でもいい、というわけでもなさそうだ。スギちゃんも、スンプルクランポック村の歴史や自然環境を観察するとともに、村人の暮らしとカンムリシロムクとの関わりを自分に引きつけて考えたことから、上記の質問ができたのだと思う。ここで大切なのは、「相手に寄り添う」ことではないか。相手の暮らし「世界」を自分のこととして感じながら、重要な事実を探し出し、そこからやりとりを開始する。「事実に基づく対話」の前提には、相手の存在にできるだけ寄り添う、という姿勢が必要だろう。



村の人と話をするスギちゃん（写真右）

琴線に触れる

さて、相手に寄り添い、共に事実を見つめていく先に何があるのか。スンプルクランポック村では、「カンムリシロムクの翔び交う村を取り戻そう」が、村人の合い言葉になり、具体的な活動に繋がっ

ていった。隣のプリンビンサリ村では、「村落観光を活発にして、高齢化の進む村に若者を呼び戻したい」という思いが活動の原動力となっている。人はどういう時に動き出すのだろうか。「これは自分（村）にとって何とかしなければならない問題だ」「このままだと自分（たち）の暮らしがたたなくなる」という「ネガティブな」問題意識も大事だろう。でも、それだけだろうか。人は、何かとても大切に思っていることを取り戻したい、或いはより発展させたい、という思いを持つとき、積極的になるのではないか。「心の琴線に触れる」と表現できるような、そんな「ポジティブ」な感覚が大事な気がする。そしてそれを引き出すには、「ないものねだり」ではなく「あるものさがし」が鍵になる。自分自身、コミュニティ自身が持っているものの意味や価値を再発見すること。過去から現在の時の流れを振り返り、未来を見据えながら、自分（たち）には何が残っていて、何を大切にしていきたいのか。そういう思いを紡いでいくことが、冷徹かつ客観的な課題の分析とともに、重要なのでは、と考え始めている。

あいあいネット流のファシリテーションは、まだ進化の途上にある。特に、現場と現場をつなぎ、学びあいから新しい発見を生み出すプロセスは、あいあいネットならではの技法が必要とされる場面だ。これからも精進していきたいものである。

日本でも実践！被災地でのファシリテーション

8月20日と21日の2日間、岩手県釜石市で保育園や幼稚園の先生方を対象にした研修会が開催され、理事の長畑と山田がファシリテーターを務めた。

これは横浜のNPO「地球市民ACTかながわ（TPAK）」が被災地支援活動の一環として実施したものだ。研修会で保護者とのコミュニケーションの難しさを感じている先生方に、相手との関係作りや「事実に基づく対話」「提案しない」といったファシリテーションの要点について、実習を交えながら考えてもらった。先生方は大変優秀で素晴らしい人柄の方ばかりだったが、「もっと保護者の方の話を聞くようにしよう」「提案するのではなく事実を聞き出すことで相手が気づくことがあるのでは」といった発見があったようだ。TPAKによる被災地での活動はまだまだ続けられるとのことだが、私たちも何らかの形で継続して協力できればと思っている。



西部バリ国立公園でのファシリテーション

～あいあいネット現地専門家、エリスさん・ヤンさんの対談～

西バリプロジェクトは今年の秋、JICA草の根技術協力事業パートナー型の枠組みで新しく4年間の活動が始まります。新たな展開を前に、西バリプロジェクトの中心メンバーである2人の仲間、エリスさんとヤンさんに、ファシリテーションの観点からこれまでの活動を振り返ってもらいました。

最初の2年

～ファシリテーション研修に明け暮れた時期～

ヤン：あいあいネットが西部バリ国立公園に関わり始めて4年近く。これまでの活動を振り返り、どんな特徴があったのか、考えてみたいと思います。最初にエリスさんが西バリに来た時、どんなことがありましたか？

エリス：私が最初に西バリを訪問したのは2009年4月でした。14名の国立公園現場職員があいあいネットの研修に参加していました。彼らは「村人と協力しなくてはならない」と感じていましたが、それを実現するために、シンプルで適用可能な技術を身につけてもらう必要がありました。そこで私たちが教えたのは、村の現場に出かけていき、具体的な事実を集め、そこから仮説を作っていくことです。

ヤン：その時に、「観察」や「インタビュー」が必要になるのですね。2009年は何回くらい西バリに来ましたか？

エリス：その後、7～8月、11月、12月と行きました。8月はハリムさん（南東スラウェシ州開発計画局の幹部）が来て、政府の役人がファシリテーターになることについてのモチベーションを高めてくれました。さらにファリーさん（NGO活動家・東ヌサトゥンガラ州選出国會議員）が現場で事実を集めることや仮説作りについて導入し、その後、11月にアジスさん（中スラウェシ州のNGO活動家）が来て、インタビューの手法について指導してくれました。

ヤン：アジスさんが事実質問の手法を覚えてくれたのですね。

エリス：はい。その時もう一つ強調されたのは、シンプルな事実質問を重ねながら、村人と上下関係を作らず、安心感を持ってもらうことです。そして観察を通じて「エントリーポイント」を見つけること。例えば牛が目の前に居るなら、そこから質問を始める。

ヤン：なるほど。

エリス：誰でも、一気に村の課題にたどり着くことはできません。村人が答えられる、シンプルな物事から質問を始めていく。これは研究者や学者の方法とは異なります。

ヤン：アジスさんは西バリに何回来たのですか？

エリス：11月の次は12月に来ました。その時は「観察」に焦点をあてました。村人に訊かずに、観察を通じて村の状況を知る、という手法です。一本の木からも、その村の歴史や自然の状況を考えることができます。

ヤン：ということは、私が最初に西バリに来た2010年5月には、研修に参加している国立公園職員たちはファシリテーターとしての基本を身につけつつあったわけですね。その時、私は確か1週間の研修をやったと思うのですが、チーム（既に9名に減って、「チーム9」と呼ばれてました）のメンバーと、「定量化」について話したのを覚えています。プジャラカン村では牛をたくさん飼っているようだが、いったい何頭いるのか？牛の餌のために、どのくらいの草が必要なのか？・・・チームの人た



エリザベス・R・プリハティニ（通称：エリス）

中ジャワ州ソロ出身のNGO活動家。

2004年にJICAの技術協力プロジェクト（PKPMプロジェクト）に現地専門家として加わり、あいあいネットの日本人メンバーと知り合う。2009年から西バリのプロジェクトに専門家として参加し、ファシリテーター育成に尽力してきた。何事にも動じず、粘り強く、面倒見のいい姉御。大の鳥好き。



ちと事実を集め、計算していった結果、村の牛の餌を確保するには、村の周りにある草だけでは到底足りない、ということに気づきました。この時がまさに、「村の利害と国立公園の利害が一致する」可能性を見つけた瞬間だったと思います。村は牛の餌のために豊かな植生を必要とし、国立公園はそうした植生を守る役割がある。ただ、この時はまだ、村と国立公園とが同じ目標で協働する、という動きには至りませんでした。



ヨハネス・ゲワ（通称：ヤン）

東ヌサトゥンガラ州出身のNGO活動家で、同じく2004年からPKPMプロジェクトに参加、和田信明氏の薫陶を受ける。NGO仲間、国会議員となったファリー・フランシスの片腕を務めながら、西バリのプロジェクトに専門家として加わる。理論家で話しをすると長い、実はお茶目で情熱の人。

スンプルクランポック村のイニシアティブ、そして他の村への展開

ヤン：チーム9の人たちが最初に「村人のイニシアティブ」を引き出したスンプルクランポック村での経緯は？

エリス：最初は私とヤンさん、2人で村を歩きましたね。そこで若者や長老と会って、いろいろ話を聞いた。その中から、この村にもカンムリシロムクが翔び交っていた昔があり、そうした時代のことを人々は懐かしく思っている。今、カンムリシロムクは絶滅の危機に瀕しており、次の世代に自分たちの記憶を引き継がないことを残念がっている、ということを知りました。そこから、「カンムリシロムクは、公園にとっても、村人にとっても、共通の課題になるのではないか」と考え始めた。

ヤン：その話を、当時国立公園の課長だったジョコさんに話したら、「うーん、でもスンプルクランポック村と国立公園とは、『距離は近いが心が遠い』関係なんだよああ」と言われた。ところが、そのスンプルクランポック村の村人を対象に、カンムリシロムクの人工繁殖研修をやろう、という計画が公園所長から出されたのでしたね。

エリス：この公園所長のアイデアをきっかけに、2010年8月以降、チーム9のメンバーが動き始めました。村に通い、人々と知り合い、事実質問を重ね、村人と対等な関係を作っていく。そうすると村人は少しずつ打ち解けてくれ、そのうちに判明したのが、「ほとんどの村人はカンムリシロムクがいなくなったことを淋しがっており、村にまた戻ってくることを夢見ている」ことでした。

ヤン：そして人工繁殖の研修が村の主催で行われ、そこから繁殖グループの結成、人工繁殖実施に向けての諸準備、州知事列席でのカンムリシロムク引き渡し式、人工繁殖の開始、ととんとん拍子に進んでいったのですよね。

エリス：今では、2013年に予定されるカンムリシロムクの放鳥に向けて、生息地の復活・整備に村人たちが取り組み始めました。そして観光振興に向けて、多様な関係者を巻き込んだ動きを作ろうとしています。さらにチーム9は昨年、国立公園周辺の他の村、プリンビンサリ村やギリマヌク村でも村人への働きかけを開始。観察、インタビュー、課題の発見、村人による行動計画作りへと進んでいます。ここで重要なのは、ファシリテーターは村に入る時に何の約束もせず、資金も持ち込まず、プロジェクトも始めない、ということです。

ヤン：こうした西バリでの活動を、私たちはインドネシア政府林業省の森林保全自然保護総局で何度か発表する機会を持ちました。その結果、このようなファシリテーター育成を通じたアプローチを、他の国立公園にも広げていく、という計画が進んでいます。

聞き手：山田理恵(あいあいネット)

研修で生まれる「まなびあい」を大切にして

—JICAベトナム研修 in 西原(山梨県上野原市)—

高橋博(あいあいネット事務局)

壽賀一仁(あいあいネット理事)

2012年2月2日から24日まで行われた「JICA-NGO連携による実践的参加型コミュニティ開発(B)」研修には、ベトナムの中央省庁や大学、大衆組織で働く中堅・幹部クラスの11名の研修員(女性6名・男性5名)が来日しました。

この研修は、あいあいネットがこれまで受託してきた従来のJICA研修とはかなり異なるものです。というのは、最終目的である「ベトナムにおけるコミュニティ開発の現場で使えるファシリテーターマニュアルおよびそれを実践可能にする政策ガイドライン作り」のために、農業や経済関連の省庁・研究機関・大学に加えて、女性連合、青年団など多様な組織から集まる同一のメンバーが、1年半の間に3回予定されている日本での研修に継続して参加するというものだからです。

その特徴を活かすため、今回私たちは新しい取り組みに挑戦しました。それは、これまでの研修で1週間だったフィールドワークを2週間に延ばし、地域の方々との十分なパートナーシップビルディング(信頼関係作り)の上で実習をおこなうとともに、第2回・第3回の研修も同じ場所でフィールドワークを実施することにより研修効果をいっそう高めるといふ試みです。今回その訪問先に挙げられたのが「いりあい・よりあい通信」Vol.1で取り上げられた山梨県上野原市西原(さいはら)。このような研修を受け入れていただくのが初めてだった上にいきなり2週間の滞在となり、地元の方々にとってスケジュールの調整などすべてが大変だったと思います

が、地域活性化のために2010年から活動しているNPOさいはらを中心にした皆様のご協力で、無事第1回の研修をおこなうことができました。

フィールドワーク初日、地域の紹介をしてくれたNPOさいはらの夏目さんに、行政制度や産業構造に関する難しい質問ばかり一方的に続けた研修員。「前日、パートナーシップビルディングについて学んだばかりなのに…」と困惑し、またホテルから西原への40分間のバス移動に弱音を吐く彼らの姿に驚き、正直先が思いやられました。

しかし、初日の質問攻めを反省し、寒さに耐えながら西原を観察して歩き回り、インタビューの練習に協力して下さったお宅では研修員同士で助け合いながら事実質問を続ける、そんな彼らの熱心な姿勢に「やはりベトナム人は真面目なんだなあ」と実感しました。その一方、お邪魔したどのお宅でも手厚いもてなしを受け、しっかりお土産までもらって



訪問先で出されたお菓子を嬉しそうに持ち帰る研修員



西原訪問の記念に植樹をする研修員



廃校になった学校に保管されているオルガンを弾いてみる

帰る彼らは、あっという間に地域に溶け込んでいたように思います。

フィールドワーク2週目は「あるものさがし」（外部者のまなざしを借りて地域にあるモノや事実を掘り起こす手法）の実習に時間を十分に取りました。1週目で山梨の2月の寒さを身に染みて感じた彼ら、いつの間にかホッカイロを持参していたようで、みんな寒さ対策も万全。2日間の実習の初日は雪に降られ天候に恵まれませんでした。西原じゅうを歩き回り観察とインタビューを繰り返す彼らの姿に研修の手ごたえを感じました。



神社の境内で説明を受けながら大木を見上げる研修員



「あるものさがし」2日目の様子

「あるものさがし」で作成した地図の発表会には、お世話になった西原の方々に加えて江口・上野原市長も飛び入りで参加してくださいました。引き続き行われた交流会では、お酒の勢いも借りてベトナム語の歌を披露した研修員。2週間のフィールドワークで、彼らは西原という地域や人・モノを大好きになっていたようです。

交流会ではNPOさいはらの理事長、船木さんがこんなことを話されていました。「最初ベトナム人の研修を西原で受け入れるって話をもらった時は正直反対でした。でも、研修を受け入れてみて、是非彼

らにはまた西原に来てもらいたいと思っています。」



「あるものさがし」で作った地図を背中に交流会



交流会の場でベトナム語の歌を披露する研修員

今回のような2週間のフィールドワークは事務方にとって少し大変です。それに今回の経験でいくつかの課題が浮き彫りになり、次回に向けて改善していかなければなりません。しかし、研修でお世話になった西原の方々から研修員に対して「是非また来てください」「楽しかったです」、さらには「今度はうちに泊まりに来てください」等の温かいお言葉をいただき、あらためて研修を通じた「まなびあい」の形を実感できたように思います。

帰国後、修得したファシリテーション技法の実践に取り組む研修員にベトナムで何度か会いましたが、誰もが西原の方々への感謝と再会の希望を語っていました。一方、西原を訪問すると、「刺激になった」「彼らはどうしてる」「一緒に撮ったこの写真を届けてくれ」「次はいつになった」と皆さん口々に研修員のことを尋ねてこられます。

JICA研修のフィールドワーク、研修員にとって大変学びの多い場であることはもちろんですが、受け入れてくださる地域の方々に対しても良い機会や経験になるよう、これからも「まなびあい」を意識した研修づくりを目指していきたいと思ひます。

カンムリシロムクの棲む森づくり ～スンプルクランポック村では今～



山田 理恵(あいあいネット理事・西バリプロジェクト担当)

「うちはよう、でっかい声で夫婦喧嘩してて、近所でも有名だったみたいだけど、今じゃあもう、静か～なもんだよ。チカールちゃんがびっくりしないようになって、ささやき声で会話したりして、ほんと、うちの母ちゃん優しくなった。」

「うちなんか、母ちゃん奮発してさー、この前ついに冷蔵庫買ったよ。ルディのマンゴーやらパイナップルが悪くなるといけねえ、って。」

「俺んちはこの間、甘くて美味しい、って評判の高級バナナを市場で母ちゃんが仕入れてきてさ～、もちろん、俺のじゃない。ロニ専用、だってよ。あっはっは。」

おじちゃん達はお砂糖のたっぷり入ったコーヒーとピサンゴレン(バナナの天ぷら)で、昼間っから盛り上がっています。おじちゃん達がうれしそうに口にして、チカール、ルディ、ロニ……。どうやら、彼らが育てているカンムリシロムクの名前のようです。

乾季に入り、すがすがしいお天気にも恵まれた5月のある日、私はスンプルクランポック村を訪れました。おじちゃん達は、村のカンムリシロムク繁殖家グループ、「マヌックジェゲグ」のメンバー。以前ご紹介しましたが、マヌックジェゲグとは、ジャワ語とバリ語で「美しい鳥」という意味で、自然保護・生計向上・観光振興の3本柱を掲げ、村の人たちが熱い想いで自ら結成したグループです。昨年、バリ州の州知事を迎えた受入式で、正式にカンムリシロムク保護協会から15ペアの種鳥を借り受け、人工繁殖を始めてからはや1年。今では12羽の繁殖に成功しています!



村で育てているカンムリシロムクと、マヌックジェゲグ事務局のイスマさん

あいあいネットは、2008年からここ、インドネシアバリ島にある西部バリ国立公園とその周辺の村との共存・協働関係構築をテーマに活動を続けています。周辺村の一つ、スンプルクランポック村は国立公園に囲まれた地域に位置し、バリ島固有の絶滅の危機に瀕した椋鳥、カンムリシロムクの生息地に隣接していて、昔はカンムリシロムクが飛び交い、人々と共存していたといえます。近年は、経済的な必要から違法伐採や密猟に手を出す村人もあり、国立公園にとっては頭の痛い問題を抱えた村でした。けれども、あいあいネットによるファシリテーション研修を通じて、西部バリ国立公園の現場職員たちは、村の人たちとどんなふうに話せばいいのか、村の人たちと友だちになるには、何をすればいいのかといった、ファシリテーターとしての作法を学んできました。そして、周辺村の村人たちに寄り添い、村人のイニシアティブを引き出す力をつけた公園の現場職員が、この村でも働きかけを行い、村に大きな変容をもたらしてきました。

現在、スンプルクランポック村では、マヌックジェゲグを中心に、生息域の整備や拡大に向けた植樹活動に取り組み始めています。



植樹予定地。2012年度はここに、デイゴの木を植える。

村のおじちゃん達は、チーム9(西部バリ国立公園現場職員)とのワークショップで、昔を振り返って、もともとはどこにどんな木が生えていたかを思い出し、カンムリシロムクの好む環境を調べて、今後村のどこにどの種類の樹木を植えるかを地図に落とし

ました。彼らの立てた計画は、村の周辺合計217,500本の植樹を目指す壮大なものですが、まずは2012年度に10,000本のデイゴの木を植えることを目標に植樹活動を行うことになりました。今、おじちゃん達は、マヌックジェゲグの事務所の横びょうほに苗圃を準備しているところです。苗木を調達するのに、関係者だけではなく、国内外に広く支援者を求めたいと考えていることから、「みんなでつくるシロムクの森」として、募金活動も少しずつ始めています。

あいあいネットでは、村人たちが自然を守りながら生計を向上させていく道の実現を図るため、「カンムリシロムクの翔び交う美しい森」を取り戻し、「カンムリシロムクの故郷」の村として観光振興に取り組む等、村の持続的な活動をバックアップし、さらなる動機づけを行っていかうと考えています。

スンプルクランボック村以外の周辺村でも、村人のイニシアティブを引き出した動きが次々に生まれてきていますが、それはまた後日別の機会に。

事務局短信

農家であることの再認識

高橋博(あいあいネット事務局)

おそらく20歳を過ぎる頃くらいまでは、実家が兼業農家であることを私は恥ずかしいことのように思っていました。専業農家だった頃を知る祖父は毎日飽きることなく農機具の手入れをし、会社勤めの父は少ない休日を農作業に充てる日々、そんな二人を見ながら育った私は、農家に対して決して良い印象を持っていなかったことを覚えています。

20歳を過ぎて少しずつ父の田んぼを手伝うようになったのは、「体力には自信があるから」とおそらく親孝行の一環だったのではないのでしょうか。しかし、その後ブルキナファソの村へ渡り必然的に農業と向き合う日々を過ごし、帰国後の今この仕事を通じて、川崎市や神奈川県多くのNPO/NGO団体と知り合い、またJICA研修や西バリプロジェクトに関わる中で、国内外を問わず地域づくりの現場で活動する方々と出会う機会がととも増えました。それぞれの地域で活動する特に同世代の方々と知り合う中で、数多くの刺激を受け、私自身の地域や農業に対する考え方が大きく変わってきたことを最近実感しています。

現在は実家を離れているため頻りに父親を手伝うことはできませんが、今年からはその機会を増やすため、専業農家である母親の実家も手伝い始めました。今では兼業農家であることを自慢に思えるようになりましたが、まずは1年を通してのコメ作りを覚えたいと思っています。私の住む埼玉県も、農家の後継者問題は非常に深刻です。いつか地元の仲間たちと共にコメ作りを通して何か地域おこしができたら…と思い描きながら、日々の業務を通じてそのための技術や知識も学んでいます。



ブルキナファソの田んぼ(陸稲)



日本(埼玉県の実家)の田んぼ



友の旅立ち ～いりあい交流とヘダールさん～

島上宗子(あいあいネット副代表理事)

追悼・ヘダールさん

2012年7月7日深夜、とてもとても悲しいニュースが届きました。

「いりあい交流」をともに進めてきた友人、ヘダール・ラウジェンさんが心臓発作に倒れ、急逝されました。51才でした。

インドネシアでは、森と土地に対する村人の法的権利が十分認められておらず、村人が故郷を追われたり、暮らしの糧を奪われたりすることが問題化するケースは今も後を絶ちません。中スラウェシ州の農山村に生まれ育ち、国立大学で法学を学んだヘダールさんは、人生の最期の瞬間まで、そうした紛争解決に全力を注いできました。2006年からは、政府、住民、企業、学識経験者、NGOの代表30名あまりからなる「国家森林会議」のメンバーの一人として、森林関係法令改正に向けた法案作りにも関与していました。

心臓発作に襲われた夜も、ジャワ島のボゴールで、NGOの会合で講師をつとめた後、一人、法案改正に向けた提言書を書いていたといいます。国の法制度に影響力を持ちえる立場となっても、暮らしぶりはいたってシンプルで、いつもTシャツにゴム草履。村人と歌を掛け合いながら踊り、ヤシ酒をかわし、冗談を言い合うことが何よりも楽しそうでした。山の民の暮らしと文化を深く理解し、愛し、だからこそ、村人の尊厳がないがしろにされることに誰よりも怒りを示し、闘っていました。

ヘダールさんは、あいあいネット設立のきっかけをくれた人物の一人でもあります。2003年、初来日の際、日本にも、森とともに生きる豊かな知恵と文化があることに驚き、そうした村の経験をもっとインドネシアに伝えてほしい、と繰り返しました。それが、日本とインドネシアの山村の経験をつなぐ「いりあい交流」構想の原点となりました。

2007年からは、日本人とインドネシア人が共同して、中スラウェシのトンプ村の暮らしと文化を記録する活動を進めてきました。7月15日には、その成果の一つ、『トンプの人々の世界』と題した本とDVDがインドネシアで出版され、20日には出版記念のイベントを開く計画をたてていました。ヘダールさんの訃報は、そんな準備の只中に届きました。

急逝から早1カ月あまりが経ちますが、ヘダールさんのfacebookには、たくさんの書き込みが続いています。ヘダールさんの死を悼むとともに、かけがえのない人が逝ってしまった喪失感を、心に残るヘダールさんの言動、思い出、写真を共有することで乗り越えようとしているかのようです。私たち、あいあいネットも同じ気持ちです。大きな大きな木が倒れてしまった……。でも、そこから一つでもたくさん芽が育つよう、ヘダールさんを通して知り合った村の人々や若者たちと、これからも学びあい、力を合わせていきたいと思います。

はからずも遺稿となってしまいましたが、『トンプの人々と世界』のまえがきに寄せてくれたヘダールさんの文章の抄訳をお届けします。



ヘダール・ラウジェン (Hedar Laudjeng) さん

(撮影: Saleh Abdullah)

1960年8月14日、中スラウェシ州ドンガラ県リンボロ村生まれ。親戚が暮らす山村で育つ。国立ハサヌディン大学卒業後、弁護士として村人の権利擁護活動に携わる。1996年、NGOバンタヤを設立。2004年からあいあいネットと協働して「いりあい交流」を進める。2006年からは、国家森林会議のメンバーとして、森林をめぐる問題解決に奔走。2012年7月7日、心臓発作のため急逝。リンボロ村に妻と2男1女の子供がいる。

学ぼう、罰があたりぬように

2003年、大阪で開かれた国際シンポジウムに招かれた。当時私は、日本のもう一つの側面をみたいと思っていた。軍隊、先進技術、武道などではない、日本のもう一つの側面。幸運なことに、友人たちの取り計らいで、シンポジウムの後1週間、日本の村々を訪ね歩くことができた。

ある村の神社を歩いていた時、一人の老人に出会った。なにを思ったか、老人は私に、森や稲、人と自然に関わるることについてあれこれ長々と語りだした。私にとってそれは驚きだった。中スラウエシの村の長老たちから耳にしてきたこととそっくりだったからだ。自然は開発すべき、単なる対象（客体）ではない！のだ。

京都大学で開かれた会合で、村々での見聞を話す機会があった。会合に参加した人の多くが、老人が私に語ったような村人の世界観を、若い世代に伝えていくべきだと話していた。残念なことに、日本でもインドネシアでも、若者は、農山村の暮らしや世界観にあまり興味を示さないようだった。

誰が言い出したのかは忘れてしまったが、日本とインドネシアで、村の暮らしや世界観を理解し、発信するための共同作業をしようとの話がもちあがった。調査というよりも、共に学びあい、友情を育むための取り組み。国や民族の違いを越

え、村人、NGO、研究者、そして音楽や絵や芸能に関心を持つ者をも巻き込んだ共同作業だ。この本と記録映像は、その学びあいと友情がうんだ成果の一つである。

いしむしろ
福島石筵集落を訪ねたとき、先進技術と一体となりながらも維持されてきた村の伝統、村人の自立性、村の森や澄んだ水の存在に私は感激し、心から賞賛した。しかし、石筵に暮らす後藤さんの反応は、「日本の真似をしてはいけない！」だった。後藤さんが何を言わんとしていたのか、そのときは十分理解できなかったが、日本で原発事故が発生し、その被害が石筵にまで及んだと聞いたとき、後藤さんはずっと先をすでに見据えていたのかもしれない、と思えた。

この本と記録映像は、中スラウエシの山の民の生活世界を垣間見るための「小さな窓」だ。山の民から私たちは多くを学ぶことができる。トンプをはじめとする山村の暮らしと世界観を知り、理解することは、自らが寄って立つ足元を見つめなおすということだ。後藤さんが言わんとしていたのはそういうことだったのではないか。カイリ族※の詩の一節を借りれば、こう表現できるだろう。自らの足元に学び、見つめなおそう。「罰があたりぬ」ように。

2012年6月18日、パルにて
ヘダール・ラウジェン



2005年6月、山形県の飯豊町中津川を訪ねた際、タコジイこと織田洋典さんと記念撮影。山形には草や木の命を供養するための草木塔がある知り、ご満悦だった。（撮影：増田和也）

Dunia Orang Tompu (トンプの人々の世界)

INSIST Press. 2012年6月発行

焼畑での陸稲栽培を軸に、トンプの暮らしと慣習・文化が絵と読みやすい文章で綴られています。①伐開の儀礼、②陸稲の種まき、③陸稲の収穫の記録映像をおさめたDVDつき。ヘダールさんの死後100日目の儀礼にあわせ、10月初旬に出版記念イベントを中スラウエシで開く予定です。本とイベントを通じて集められた寄付金は、ヘダールさんの3人のご子息(大学生、高校生、小学生)の学費として役立てます。インドネシア語ですが、ご希望の方はあいあいネット事務局までご連絡ください。



私のオススメ地域

滋賀県長浜市余呉町摺墨（するすみ）集落

私は、これまでインドネシア、スマトラ島の村落で、のべ3年間ほどを過ごす機会に恵まれた。その中で強く興味をもったことがらの一つが共有の森であり、それは「いりあい交流」へとつながっている。そして、もう一つが焼畑である。こちらは、京都を中心に焼畑や森への火入れに関心をもつ有志が集まり、「火野山ひろば」というグループの活動へと展開している。滋賀県内では1960年代まで、湖北地方の山村では焼畑が、湖西地方では柴草や茅を得るために山林へ火を入れる慣行があり、「火野山ひろば」では、こうした現場を訪れながら、山林への火入れを試みてきた。そうしたなかで出会ったのが、湖北の余呉町（現・長浜市）で現在もただ一人焼畑を拓かれている永井邦太郎さんだ。そして、その永井さんが暮らす集落が摺墨である。焼畑は別集落の山林で拓いているが、私たちはこうした縁で摺墨の方々と知り合うようになった。4年前のことである。以来、私たちはしばしば摺墨にお邪魔するようになった。

そうしたなかで、集落の方から「（集落を活性化するような）何か新しいことを提案してほしい」という宿題をいただいた。しかし、何かを提案するには、集落のことを知らなくてはならない。こうして農作業や祭事にお邪魔させていただきながら、私は訪問を重ねるようになった。やがて、集落の暮らし、あるいは集落というまとまりを支えるために、どのようなことがなされているのか、ということが少しずつ見えてくるようになってきた。とはいえ、集落への興味が広がる一方で、具体的な提案はなかなか浮かばず、ふたたび摺墨に向かうという深みにはまっている……。

田植えと稲刈り、忘年会という機会には、友人や知人に声をかけて賑やかに摺墨を訪れています。機会があれば、ぜひ一緒に。

増田和也（あいあいネット理事）

写真 「Do いなか(ドゥーいなか)」のメンバーと共に、田植えを終えて記念撮影（撮影：島上宗子）
※「Do いなか」は摺墨の方々が、集落営農に関連して組織したグループ。「どいなか」ということだそうだ。



今年も生田緑地サマーミュージアムに参加しました

事務所のある川崎市多摩区で毎年開催される地域のイベント、「生田緑地サマーミュージアム」に今年も参加しました。今年は西バリの活動に焦点を当てて、うちわ作りのワークショップを行いました。“シロムクの棲む森はどんなだろう？”と、想像しながらうちわに描いてもらいました。

参加2年目の今年は、昨年よりも地域や商店会の方々と会話ははずみ、楽しみながら地域の行事に参加させてもらいました。



ワークショップでは、ボランティアさんやインターン生が大活躍！

あいあいネットの仲間になりませんか？

私たちは、「社会が変わるヒントはコミュニティにある」と信じて、コミュニティが元気になるような活動を続けています。日本と世界の仲間たちとの、まなびあい、つながりあいの仲間になりませんか？

- ◆正会員（総会での議決権あり）… 10,000円／年額
 - ◆賛助会員（総会での議決権なし）… 5,000円／年額
 - ◆寄付 … どなたでも、いつでも、いくらでも
 - ◆ボランティア … イベント・事務局作業の手伝い、翻訳など
- ※ご入会の際は申込書が必要です。事務局までご連絡下さい。

2012年9月20日
発行：一般社団法人あいあいネット
〒214-0031 神奈川県川崎市多摩区
東生田1-14-5 アムールK2 102
Tel/Fax : 044-455-4508
発行者：和田信明
編集：高田尚子